

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーション

とどけウクライナへ

95年ミルクキャンペーン

— 事故10周年、チェルノブイリへ粉ミルクを —

前回のミルクキャンペーンは、阪神大震災の救援活動のために、キャンペーンを途中で打ち切りましたが、約200万円の寄付が寄せられ、現地へ送り届けました。ジトーミルク州立小児病院の院長は、粉ミルクは大変貴重なもので、「薬のように使用している」と語っていました。今年もまた粉ミルクを送ります。皆様の温かい御支援をよろしくお願ひします。今回のキャンペーンでは、0-6ヶ月用の粉ミルクを2トン購入し、現地へ送る予定です。

<キャンペーン期間>

1995年10月1日-1995年12月31日 (3ヶ月間)

<ミルク代の振り込みは>

1口2000円より。半口1000円でもかまいません。

郵便局で郵便振り替え用紙に必要事項をご記入の上、下記あて振込んでください。

<キャンペーン実施団体>

今回のキャンペーンは下記の団体が担当しています。お問い合わせは、下記事務局か、「チェルノブイリ救援・中部」事務局をお願いします。

ミルクキャンペーン事務局

「チェルノブイリ救援基金・浜松」 〒431-31 浜松市笠井町1299-2
代表 高井 信行 TEL 053-435-1419



《事務局》〒466 名古屋市昭和区茶園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：渡辺春夫

【郵便振替】00880-7-108610 (旧番号 名古屋8-108610も可)

☎FAX:052-836-1073 (月・水・金・10:30~15:30)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。)

《各地のたより》 — 浜松より —

95. ミルクキャンペーンもよろしく！

「チェルノブイリ救援基金・浜松とミルクキャンペーン

今年もP10月1日から12月31日までミルクキャンペーンが始まりました。チラシ、ポスターも揃っています。欲しい方は下記事務局までお知らせください。

私たち浜松のミルクキャンペーンとのかかわりは、はじまりからです。事務局のよびかけにフリーマーケットとコンサート、各イベントに便乗したりと宣伝とカンパ集めに多少の苦労も伴いながらも楽しくやってきました。救援中部の甘い言葉とやさしい誘いにすっかりその気になって93年には浜松と静岡がミルクキャンペーン事務局を担うことになりました。事務的な仕事（チラシ作りや発送など）もスタッフの力でスムーズにこなし、4500個のミルク缶の陳列展示の一大イベントも盛況でした。なによりも静岡県内のポストトカンパ協力者が飛躍的に増えて事は嬉しい成果でした。93年に続き94、95年と事務局を担当することになりました。ミルクキャンペーンは浜松からでということです。

93年の反省から94年から事務局の簡素化やメッセージカードの省略化など様々な変化がありました。この簡素化のおかげで確かに楽になりました。しかし一方でボランティアの人々への働きかけが弱くなったり、スタッフの固定化や離散という状況も作り出していきました。たいへんな仕事を皆でやり遂げるといった共通の目標を作り出し、和気あいあいと進められることが望ましいようです。

今年も浜松「カメの家」へのミルク缶の搬入には、いつもの顔が集まり、いっしょに汗を流しました。汚染のないミルクをウクライナへ届けることはもちろんのこと、その為のボランティアで汗を流し自己満足を得ることもとても大切です。私たち一人一人の力の結集が、ミルクキャンペーンの成功につながっていきます。締め切りにはまだまだ日があります。よろしくお願いします。

ミルクキャンペーン事務局「チェルノブイリ救援基金・浜松」

〒431-31 浜松市笠井町1299-2 代表 高井 信行

電話・FAX 053-435-1419



—ポレーシェ読者の皆様へ！—

岐阜が放射能のゴミ捨て場に・・・

すでに新聞やテレビでご存じかと思いますが、8月21日、岐阜県瑞浪市に高レベル放射性廃棄物の地層処分実験の「超深地層研究所」計画が突然公表されました。地元自治会は動燃（国）のなりふりかまわぬ強引さに強く反発しています。

また、地元市民による「高レベル放射性廃棄物を考える東濃ネットワーク」も結成され、市長に対する署名活動などが起きています。

この研究所は、研究学園都市構想の一環として、カモフラージュされた形でPRされていますが、現実には最終処分場への入り口となるものです。

なぜなら、国は、“放射性廃棄物処分方策の中間報告書”で、“試験地（深地層試験場）は、その後の研究開発の結果が良好であれば、処分地となり得る”と明確に位置づけているからです。

この“核のゴミ”は何千年も強い放射能と熱を出し続け、地下深く処分しても、ひとたび漏れ出せば、将来にわたって広い範囲の放射能汚染は免れません。

予定処分量は、ガラス固化体（一本で広島型原爆30発分）にして3,000~7,000本分。広島型原爆10万発分以上という量が、広大な地下処分場に廃棄されます。

私たちは、岐阜県・瑞浪市がこの“研究所”を受け入れれば、高レベル放射性廃棄物（使用済み核燃料＝死の灰）の最終処分地につながる可能性が高いと考えています。

動燃は、“研究所については”最終処分地にしないとっていますが、実施主体の決まらない中で、周辺市町村を含めて、岐阜県内のどこかが、将来、最終処分地にならないという保証は何もありません。また、岐阜県内だけでなく、放射能のゴミを地下に捨ててしまおう、ということ自体を見直してほしいと思っています。

この問題を自分のこととして考える人が各地から緊急に集まって、10月27日に、“放射能のゴミはいらない！市民ネット”が発足しました。

私たち、救援・岐阜は、チェルノブイリ救援活動を続け、放射能汚染の悲惨を実際に知る立場の人間として、この無謀な計画に対して、はっきりと“NO！”と声を上げていこうと、呼びかけ人として一緒に行動することにしました。

何をどこまでできるか白紙の状態ですが、できることから始めます。

あなたも是非、この問題を一緒に考え行動してください。

(チェルノブイリ救援・岐阜) 寺町 みどり ☎fax0581-22-4989



《放射能汚染を調べるために、ウクライナ製の放射能測定器（外装はチャチですが、中の機器は精密で、性能は日本製と同じ）を廉価で会員の皆さんにお分けします。希望者は救援・中部事務局まで、お問い合わせください。》



ウクライナ訪問記 (2次医師派遣 95.10.20~31)

戸村 京子

(ウクライナの医療システムについて)

今年7月の第1次医師派遣に引き続き、第2次として、今回は岐阜県立病院の内科医師(血液学専門)栗本秀彦さん、臨床検査技師・松浦千秋さん、救援・中部から戸村の3人のメンバーでウクライナへ行ってきました。

「ウクライナの10月下旬は日本の12月」とは聞いていたものの、やはり晩秋を過ぎて冬でした。日中の気温が0~5℃、夜はマイナスなのに、着いて3日目ごろまではエネルギー不足から暖房が入っておらず、長いコートにブーツ、手袋、夜も厚着して毛布にくるまって、という状態でした。

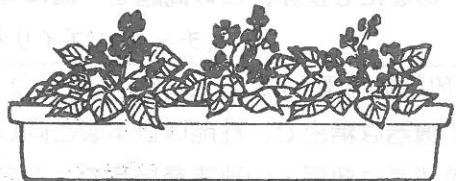
さて、今回訪問した病院、医療関係機関は前回と同じ所もあったのですが、栗本医師のまた違った視点での意欲的な視察で、新たに幾つかのこと、さらに現地の医療システムの全体が良く分かるなど、大きな収穫があったと思います。

医療関係ではジトーミル州立小児病院、州立成人病院、ジトーミル市立第1病院、内務省病院、総合医療院(外来のみ)、診断センター(検査機関)、薬局(国営、個人)を訪問しました。

ウクライナと日本では大きな医療システム上の違いがあります。人々は病気になるるとまず外来専門の総合医療院(ポリクリニック)にいき、軽い風邪などは処方箋をもらって、医薬分業なので薬局で薬をもらいます(本来医療費は無料だが経済混乱の現在は買わなければならない。しかも必要な薬が置いていなくて処方箋の通りに薬がそろわない)。

重い病気の場合は、診断センターで検査を受けたり、病院に入院します。本来無料ですが現在では薬や注射器などを自分で手にいれたうえで入院しなければならない場合が多いという、大変厳しい状況です。

チェルノブイリ被災者やさらに事故による障害者は、証明書があれば薬が貰えるという優遇措置が取られるはずなのですが、実際には手には入らないのが現状のようです。私たちの訪問中にも幾つかの団体から苦境を訴えにこられ、救援・中部の現地窓口である『移住基金委員会』もこれをなんとか解決したいと奮闘しています。



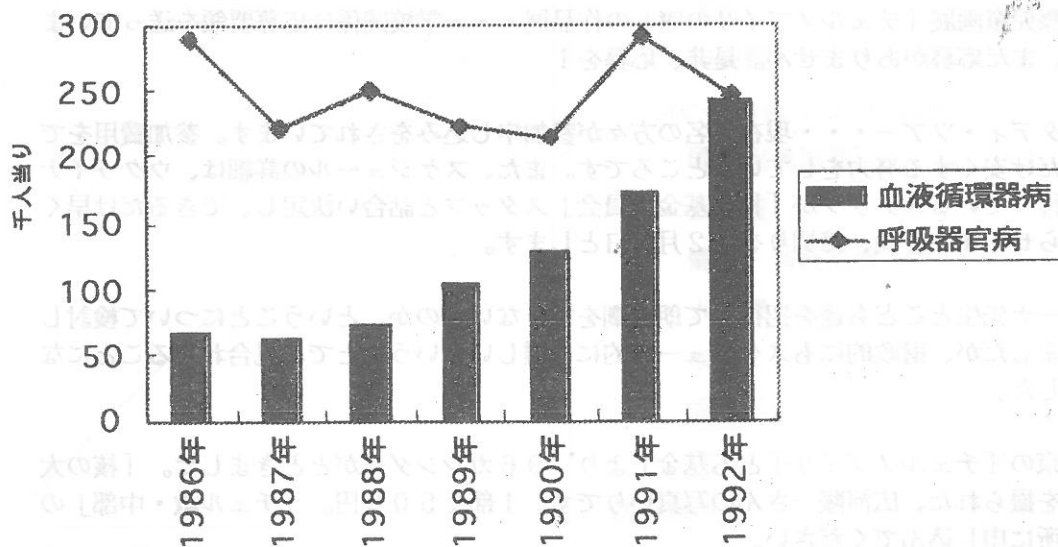
— 汚染地域で働く人々 —

チェルノブイリ原発の事故後、強制移住地域となり一般には無人地帯（現地では閉鎖ゾーンと呼ぶ）と言われているこの地域には、今でも3000世帯の住民がすんでいます（ウクライナ）。政府の移住対策が資金難で進まないからです。またチェルノブイリ原発は現在4基のうち2基が動いており、5500人の人々が3交代で働き首都キエフの電力の40%をまかっています。

そのため、この閉鎖ゾーンを警備する警察や軍隊、絶えず起こる山火事に出動する消防士、村役場など行政機関で働く人々、あるいは原発労働者など、閉鎖ゾーンで働く人々も日夜被曝し続けています。こうした人々（閉鎖ゾーンの職員と呼ばれる）の健康管理はウクライナの軍当局が一括してコンピューターで管理し、分析しています。

今回は発表された論文から、これらの人々の病気の現状の一部を紹介します。ここで働いた人々12500人の殆どが働き盛りの人々です。男性が79%、女性は21%。

汚染地域労働者の病気の推移



心臓病や脳血栓、高血圧などをふくむ血液循環器病が事故（1986年）以後確実に増加し、事故当時の4倍にもなっています。風邪や気管支炎などの呼吸器の病気はあまり変動がありません。循環器病はいまでは風邪なりに増加し、4人に1人の労働者が苦しんでいます。この中、脳血管病では被曝線量25レム以下を含む全職員平均が1000人当り45人に対し、人数で4.5%をしめる25レム-100レムの人々では1000人に246人と5倍も多くなっています。また、胃潰瘍や胆嚢炎など消化器病も全労働者の40%の人が罹り、25レム以上の人々の1000人に805人がノイローゼなど精神障害に悩まされています。このように、これまで知られなかった放射能の影響が次第に明かになりつつあるのです。

チェルノブイリ救援・中部ではこれらの汚染地域労働者の病院にも医薬品や医療機器を送っています。

(河田)

救援・中部 運営委員会報告・・・10, 29愛知県小坂井町にて

—第2次医師派遣中の委員会でした

♥ミルク・キャンペーン・・・11月18日、静岡・星美学園の生徒さん達によって、ミルク缶にラベル貼りが行われます。また、静岡の榛原地区の生協まつりで、組合員の方がキャンペーンを展開されました。

今回、ウクライナに送るミルクは、今まで送っていた新生児用の物とフェニールケトン尿症の赤ちゃん用のミルクです。ポスター・チラシは事務所にまだありますので、必要な方はご連絡ください。

♥ジトーミルでの映画上映会・・・借用しようと思っていたフィルムの保存状態が悪く、再度捜すことになりました。

♥ボランティア貯金交附金で、被災した消防士さん達の治療を行っている内務省病院に、内視鏡を贈りました。

♥国際児童画展「チェルノブイリの鐘」の作品展・・・学校関係に応募要領を送っていますが、まだ応募がありません。是非、応募を！

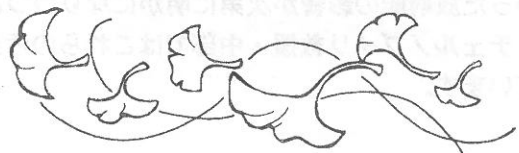
♥スタディ・ツアー・・・現在5名の方々が参加申し込みをされています。参加費用をできるだけ安くする努力をしているところです。また、スケジュールの詳細は、ウクライナに行っているスタッフが「移住基金委員会」スタッフと話し合い決定し、できるだけ早くお知らせします。尚、締切りを12月8日とします。

♥ニーナ先生と子ども達を招待して朗読劇をできないものか、ということについて検討していましたが、財政的にもスケジュール的にも難しいということで、見合わせるようになりました。

♥東京の「チェルノブイリ子ども基金」より'96カレンダーがとどきました。「核の大地」を撮られた、広河隆一さんの写真入りです。1部1500円。「チェル救・中部」の事務所に申し込んでください。

♥浜松聖隷病院から寄贈された5台の保育器は、無事10月9日オデッサ港に到着し、「移住基金委員会」に届きました。

そのほか、現在の救済のあり方をどうみるか、今後の救済をどうしていくのか、それに対する「チェル救・中部」のスタンスは？等討議し、これらはとてもたいせつな問題なので、時間をゆっくりと話し合おうということになりました。また、ポーシェに「読者の広場」のような読者の声を載せるスペースをつくりたいということも提案されました。



チェルノブイリ救援・中部の収支報告
(1995年4月から9月まで)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
前期繰越分	11,522,936	救援物資関連	9,450,863
救援寄付金	3,349,307	(内訳) 医療機器	2,882,087
(内訳) 個人: 264件	1,497,908	医薬品	5,753,760
団体: 17件	1,851,399	輸送費、通関料	815,016
郵政省国際ボランティア貯金	3,609,000	第1次医師派遣、現地訪問	1,963,524
運営費関連	1,516,064	阪神大震災関連	541,137
(内訳) 維持費カンパ	1,199,830	運営費関連	2,333,998
テレカ、書籍等売上	316,234	(内訳) 通信費、郵送費	764,230
預金利子	143,956	電話代	246,483
		印刷費	81,682
		コピー機修理、パソコン部品代	41,825
		国内出張旅費	131,569
		会場費	14,195
		備品・消耗品費	60,833
		人件費	671,790
		家賃・光熱費	262,595
		振込手数料など	58,796
		小計	14,289,522
		次期繰越	5,851,741
総額	20,141,263	総額	20,141,263

《チェルノブイリ救援・中部 スタディーツアー》

・・・参加者募集のお知らせ・・・

1996. 4. 19(金)～4. 29(月)の11日間

参加費用 248,000円(お一人)

☆参加申し込みは、事務局に、12月8日(金)までに。

☆詳しくは、同封の色チラシをご覧ください。

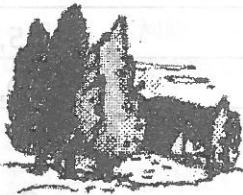


- 9月13日 戸村さん、山盛さん、スタディー・ツアーのための資料集めのため航空会社まわり。
- 15日 運営委員会。於：名古屋市の愛知県中小企業センター。
- 20日・27日 藪さんより事務局へ会計引き継ぎの作業。
- 22日 震災で神戸から岐阜に移住された滝川さんから電話いただく。この夏の暑さにかなりこたえていられるようす。やはり、神戸が懐かしいお気持ちが強く伝わってきました。
- 10月1日 運営委員会。於：岐阜市の上宮寺。
ハート・ツー・ハート・キャンペーンとミルク・キャンペーンの開始日。
- 13日 第二次医師派遣事業の打ち合わせ。スタディー・ツアーの打ち合わせ。
- 16日 第二次医師派遣の際ウクライナへ持参する医薬品その他の集荷と荷作り。
- 20日 第二次医師派遣団、名古屋空港出発。戸村、松浦に岐阜県立病院の栗本医師の3名。渡辺代表見送る。
- 23日 郵政省国際ボランティア貯金交付団体の活動報告会。於：名古屋メルパルク。渡辺代表の他に3団体が報告。
- 29日 運営委員会。於：小坂井町民会館。
- 31日 第二次医師派遣団無事帰国。現地の医療事情をしっかりと調査して。お疲れ様でした。

(松田 記)

◎先号のポレーシェでワープロをお願いしましたところ、早速3台をご寄贈いただきました。大分県の麻生さん、名古屋市の龍田さん、どうもありがとうございました。

㊦“ハートTOハートキャンペーン”締め切りは、12月10日に延期します。すてきなカードをお寄せ下さい。



《編集後記》 ✕50年ぶりに中国を訪問しました。現地の皆さんの協力で生家が見つかり、やっと故郷に帰り着いたと、万感胸に迫る思いでした。青島の皆さん、ありがとう。(幸) ✎岐阜は原発の風下地帯。まして“核のゴミ”なんかいらないと走り回る毎日(3Pを見てね)、その合間をぬってのポレーシェ編集でした。取り返しのつかない放射能汚染。ノーモア、チェルノブイリの思いを広げたい。(み)